

[マラウイ]

隊員時代の経験生かし 農民の自立を支援

貧しい農村地域の住民の自立を目指し、マラウイで活動する元青年海外協力隊員がいる。彼の強みは、隊員時代に培った経験と技術、ネットワークだ。

Close Up!

ジャイカの
あしあと



アフリカのマラウイ北西部、ムジンバ県。農民たちに地域の資源を生かした農業を指導しているのは、元青年海外協力隊員の丹羽克介さんだ。

同国では農民が就業人口の8割を占めるが、天水に依存する自給自足的農業のため、干ばつなどの自然災害に脆弱で、農村部人口の67%は貧困状態にあるといわれている。特にムジンバ県の世帯の1割が年間を通じて食料を十分に確保できない。そこで2005年9月から同県で実施されているのが、(社)青年海外協力協会(JOICA)の農民自立支援プロジェクト。現地代表を務める丹羽さんは、野菜栽培などに関する研修を通して農民リーダーの育成に取り組んでいる。研修では他地域で活動する栄養士隊員やJICA専門家などの協力を得て、野菜の加工方法や水路の作り方も伝えている。

農民が自分たちの力で地域を活性化させるため、丹羽さんが最も心掛けているのは、彼らの自発性を尊重すること。その理由は、1997～99年に野菜隊員としてマラウイで活動した当時、日本と異なる

なる環境の中で野菜栽培の技術だけにとられ、人々の考える力を養う機会をつくれなかったから。だが今は、隊員時代に身に付けた同国の言葉と慣習、地域に適した野菜栽培技術、豊富なネットワークを生かして人々の意欲や自主性を引き出そうと努めている。

マラウイの人々は先進国による長年の物的支援に慣れてしまい、丹羽さんから何ももらえないと分かると離れていく人もいる。その一方で、研修で学んだ野菜栽培技術を試して成功し、それをほかの村人に伝える人も出てきている。

元マラウイ農業食糧安全保障省地域事務所所長で、現在プロジェクトのスタッフであるアルバート・ムスクさんは、これまで多くのドナーと仕事をしたが、農民の自立をこんなに真剣に考えてくれるプロジェクトは初めて。人々の意識が変わればマラウイの貧困は克服できると丹羽さんと二人三脚で頑張っている。

